

## 安産を願う風習

県内各地には、安産を祈願するとともに、出産後にお礼参りをする昔からの風習があります。



勝願寺の地藏けやき（鹿沼市）



延生地蔵尊（城興寺 芳賀町）  
（城興寺写真：「とちぎの百様」より）

## ～とちぎ人の想い～

私の母は、延生地蔵尊でお参りし、安産祈願をしました。双子である私たちを出産する時に、場合によってはどちらかを諦めなければならぬと言われましたが、無事出産できました。私たちも、今ではそれぞれに子どもが生まれ、元気にすくすくと育っています。

## 〈安産を願う風習の例〉

- 勝願寺（鹿沼市）の地藏けやきには、二体のお地藏さまがまつられています。お地藏さまは、「子育て地藏」、「子さずけ地藏」と呼ばれており、身につけている赤いおかけを妊婦さんが授かり、出産の後には、赤ちゃんにそのおかけをつけて、健康を祈ります。その後、感謝を込めて赤い布でおかけを縫い、お礼参りとしてお地藏さんにつける風習があります。
- 延生地蔵尊（芳賀町）は、安産・子育ての守り神です。安産のお祈りをする時、御札が授けられますが、御札を挟んでいる竹に節があれば男の子、節がなければ女の子が生まれるといういわれがあります。出産の後には、お礼参りをします。
- 将棋の駒である「香車」を興雲律院（日光市）などへ納める人もいます。香車は、まっすぐにしか進めない駒であるため、赤ちゃんが産道をまっすぐに進んで安産になるようにとの願いが込められています。
- 妊婦さんやその家族に、打上花火殻を安産・子育てのお守りとして手渡す地域もあります。貰った人は、子どもが周りから祝福されて生まれてくることに感激をするようです。

## 川俣の元服式（かわまたのげんぷくしき）

日光市の川俣地区では、男子が数え年<sup>※</sup>20才の成人を<sup>むか</sup>迎えると元服式を行います。これは、遠い親戚<sup>しんせき</sup>などの中から、成人した後に様々な場面で世話をしてくれる親分を選び、親分・子分の関係を結ぶ<sup>ぎしき</sup>儀式です。

500年以上も続く、人間関係を深めるためのならわしで、国の重要無形民俗文化財<sup>みんぞく</sup>になっています。

※数え年=生まれたときは1歳<sup>さい</sup>で、次の正月が来ると1歳増えるという数え方。



手前が親分夫妻、向かいに新成人



親分・子分「固めの盃（さかずき）」



元服を祝って舞われる三番叟（さんばそう）と  
夷大黒舞（えびすだいきくまい）

（写真：日光市提供）

## 〈「元服式」の様子〉

当日は、地区の住民が見守る中、<sup>もんつき</sup>紋付<sup>はおりはかま</sup>羽織袴で正装した新成人が、付け人を横に従え、親分夫妻と縁起物の料理（下写真）を挟んで向かい合います。



親分・子分はやオチョウ・メチョウと呼ばれる小学生がついた「固めの盃」を飲み交わしたあと、「血肉を分けた深い関係になる」という縁起から、生魚を食べ分けます。



## きどころ寝(ね)をしない

「きどころ寝」とは、茶の間など<sup>しんしつ</sup>寝室以外の場所で、服も着がえず、少しの間寝てしまうこと。服を着たまま、所かまわず寝てしまう様子をいましめるものです。

〈こんな時に使います〉

ZZZ・・・



こんなところで  
「きどころ寝」して  
いないで、早く宿題を  
終わらせなさい!

～とちぎ<sup>じん</sup>人の想い～

ついつい寝てしまうきどころ寝。気持ち  
がよいものですが、食事の後などにきど  
ころ寝をしていると、親から「行儀<sup>ぎょうぎ</sup>が悪い。」  
「消化に悪い。」と注意されました。

## 〈きどころ寝の説明〉

畑仕事などで体が<sup>つか</sup>疲れてくると、お昼  
ごろひと休みしたくなるものです。ひと  
休みした後は、再び仕事にもどるので、  
着物を着替えず、家の中の適当な場所で  
ごろっと横になります。野良<sup>のらぎ</sup>着のまま少  
しの時間眠ることをキドコロネ(着所寝)  
というようになりました。

布団<sup>ふとん</sup>に入らず、うつらうつらしている  
とかげをひくこともあります。また、お  
風呂<sup>ふろ</sup>に入ったり、宿題をやったりするな  
どの、本来やるべきことがおろそかになっ  
てしまいます。

きどころ寝には、時間をむだにせず、  
節度ある生活を大切にしたいという思い  
が込められているのでしょうか。

すわっている場所に横になって寝てし  
まう様子からイドコロネ(居所寝)とい  
うところもあります。



## 義理（ぎり）に行く

知り合いから訃報<sup>ふ ほう</sup>※を受けたとき、通夜・告別式の前に  
 弔問<sup>ちようもん</sup>をすることです。亡<sup>な</sup>くなった方の家族に速やかに弔  
 意<sup>い</sup>を示し、悲嘆<sup>ひ たん</sup>する相手方の心情<sup>しんじょう</sup>に寄り添<sup>そ</sup>う意思を示す  
 行い<sup>い</sup>です。

※訃報＝人が亡くなった知らせのこと。

## 〈義理とは〉

昔<sup>たが</sup>から互いに助け合う関係で成り立っ  
 ているムラ社会において、道徳や慣習の  
 基準となっていました。義理には、親分  
 子分関係、本家分家<sup>ほんけぶんけ</sup>関係、親類<sup>ちんじゆ</sup>関係など  
 の個人的なものと、鎮守<sup>ちんじゆ</sup>の祭礼、労働、  
 葬式<sup>そうしき</sup>、火事などのムラ全体にかかわるも  
 のに分けられます。中でも葬式と火事にお  
 ける義理は、人間関係をよくする上で  
 大切にされてきました。

これらの義理には、御祝儀<sup>ごしゅうぎ</sup>や年中行  
 事、わら屋根のふき替え、田植え、稲刈  
 り等の農作業で果たしたり返されたりし  
 ました。今でも、義理返し（ぎりがえし）  
 ということばが残っています。

## 〈こんなときに使います〉

昨日の夕方、私の家に自治会長さんがやっ  
 てきました。何だかとても悲しい顔をしてい  
 たので、母が

「どうしたのですか？」

と尋ねると

「〇〇さんちのおばあちゃんが亡くなったん  
 だよ・・・。」

と言いました。その知らせに母は大変驚いた  
 様子でした。しばらくすると、母は黒っぽい  
 服装<sup>ふくそう</sup>に着替がえ、

「〇〇さんちに義理に行ってくるからね。〇〇  
 さんちのおばあちゃんにはお世話になり、  
 感謝の気持ちでいっばいだよ。」

と言って出かけました。

## 〈プラス1情報〉

訃報<sup>こうもん</sup>を告げられ、香典<sup>そな</sup>を供えることを「梅  
 やみをつく」「義理を果たす」という地域も  
 あります。

とちぎ人は、  
 「義理がたい」まるね!



## こじはん

食事と食事の間のちょっとおなかがすいたときに食べる間食のことを、「こじはん」といいます。農作業の合間に、いっしょに作業をしている家族や地域ちいきの人が休憩きゅうけいとともに集まって、みんなでとることもありました。

〈こんな時に使います〉

○農作業中の人が・・・

「はあ、くたびれたから、  
こじはんですっぺ。」

○植木剪定の職人せんていさんに、  
休憩時間にうどんを出したとき・・・

「こりゃ、おれらには  
こじはんだな。」

○農作業の休憩を進めるとき・・・

「こじはん、あがって。」  
(ちょっとした食事を用意したから  
食べて。)

～とちぎ人じんの想い～

- ・「こじはん」は、カ仕事や農作業を行う人たちに、「お疲れ様です。」「ありがとう。」といったねぎらいや感謝の気持ちを込めて出しました。
- ・子どもの頃ころ、畑すわに座って、みんなでいっしょに大皿にのったおにぎりを食べたことを思い出します。

〈こじはんの説明〉

カ仕事をする農家の人たちは、おにぎりや漬け物、飲み物などを準備して畑や田んぼに出向き、作業が一段落したときや一休みするときに、みんなでいっしょに「こじはん」をとっていたそうです。

「こじはん」には、おにぎりなどの主食になるものや里芋さと芋、じゃがいも、さつまいもといった芋類や漬け物などを食べました。

言葉の由来は、小さな昼食（軽い昼食）を表す「小昼飯」が変化したものだといわれています。



## 事八日（ことようか）

2月8日と12月8日を総称して事八日そうしょうといひます。2回の事八日は、正月行事の始まりと終わりの日とも考えられています。コトは神事かみごとのことで、主に神々の送迎そうげいに関わるものです。栃木県では、疫病神やくびょうがみが訪れる日といわれ、これを追ひ払はらう行事が各地で伝承されていひました。

メカイをかかげる

(平成十三年鹿沼市笹原田  
県立博物館提供)

## ～とちぎ人の想い～

70年くらい前は、十分に好きな物を食べられない時代でしたが、事八日には赤飯や魚のごちそうが食べられたので、楽しみでした。

## 〈プラス1情報〉

- コゴト（小言）の始まり、終わりの日ともされています。
- 7日の夜には、履物はきものをきちんとそろえておかないと、「疫病神に印を押される」ともいわれています。

## 〈事八日の説明〉

事八日は、ダイナマコという一つ目の疫病神たげさかがやってくる日とされ、竹竿たけざおの先に目（マナコ）のたぐさのきさきあるメカイ（目籠）をつけて家の軒先のきに立てかけたり、ニンニクや豆腐とうふを串くしにさして戸口に置いたり、また、草刈籠くさかりかごをさかさにして門口かどに置いたりしました。

さらに、「笹神様」といって笹を3本ささ束ねたものを庭にわに立て、束ねたところたばにうどんやそば、小豆飯あずきめしなどを供えた地域もありました。この行事は、栃木県や茨城県にしか見られない行事で「北関東のササガミ習俗そな」として国の文化財に選択されています。

また、この日は針供養はりくようの日でもあり、針はりを使う仕事たがさに携たづさわる人たがさや裁縫さいほうの技術そなを覚える人たちにとっては、針仕事を休む日でした。



## サナブリ

田植えが終わった後に、手伝ってくれた人たちをねぎらい、美味しい料理を食べたりお酒を飲んだりする慰労会いろうかいのことをいいます。家族や手伝った人たちが飲食を共にし、無事に田植えが終わったことを祝いました。

### 〈サナブリの説明〉

田植えは、今では機械化が進み、少ない人数でも作業することができます。しかし、昔の田植えは、苗代作りなわしろから田植えが終わるまで大変な忙しさでした。

特に、手で植える田植えは、長時間、こし腰を曲げた状態で作業を続ける重労働でした。したがって、田植えは多くの人手を必要とし、家族や近所など総出で行う集落あげでの共同作業となっていました。

サナブリは、田植えが終わって一段落ついた束の間の息抜きの日でもありました。農作業を休む日としていた地域もあります。

各家庭で行うもの（コサナブリ）と、集落全体で行うもの（オオサナブリ）があります。食べ物も、かしわ餅かしわもちやあんころ餅あんころもち、炭酸まんじゅうを作るところや、各家庭料理を持ち寄るところなど、地域や家庭によって様々です。



田植え

（昭和 48 年宇都宮市篠井地区  
柏村祐司氏撮影 県立博物館提供）

### 〈サナブリでは道具に感謝も！〉

オオサナブリの時には、田植えに使用した農具をきれいに洗い、お神酒みき※を供え、田植えが無事に終了したことに感謝をしました。そして、豊作を祈りました。

※お神酒＝感謝や願いを込めて、神様に供えるお酒。

家族や親戚しんせき、近所の人たちがお互い助け合って田植えをしていたまるね。サナブリで、人と人のつながりをより強めていたまるね。



## 敷居（しきい）をふまない

最近では、出入り口がドアの家が多くなってきましたが、昔はほとんどの家が引き戸で、敷居がありました。

「敷居は親（主人）の頭だからふんではいけない」、「敷居には神様がいらっしゃるからふんではいけない」などといわれ、敷居はふまないでまたぐように教えられてきました。



出入り口の敷居（益子町 大山栄氏宅）



敷居の他にも、「畳のへり」をふんではいけないというマナーがあります。

### 〈“敷居をふまない”の説明〉

敷居をふんではいけない理由にはいくつかあるようですが、そのひとつとして、敷居が汚れたり、すり減ったりすることで、戸の開け閉めがしにくくなるを防ぐためだったということがあげられます。そこで、ふむことができない「親の頭」や「神様」を敷居にたとえて、「敷居をふんではいけない」と教えたのでしょう。

また、家の出入り口の敷居には、外の世界とその家の世界の境界を表すという考え方があり、大切な場所とされていました。

敷居をふまないで入るようにするのはもちろんですが、他の家を訪問したときなどは、家に入る前にくつの汚れを落としたり、身だしなみを整えたりするのも大切なマナーですね。



敷居はふまないで、  
またぐまる！



## ジブ

昔、日光市の<sup>くりやま ち いき</sup>栗山地域では、<sup>かんたん</sup>簡単に物が手に入らなかったため、着物がすり切れてもすぐ捨てず、他の古くて着られなくなった衣服の一部を切り取って、あて布としてぬい合わせることで、最後まで大切に使い続けました。

そのことをくり返していくうち、たくさんのつぎ当て<sup>も よう</sup>が模様のようなになった着物を「ジブ」といいます。

〈<sup>くりやま ち いき</sup>栗山地域の<sup>ゆ にしがわ</sup>湯西川に伝わる「ジブ」〉



(画像 小山市立博物館第 71 回企画展図録より)

これは、そでの形が“モジリスッポ”とよばれる、男性が冬の仕事着として着ていた「ジブ」です。そで口が小さいので温かく、かつ、たもとが三角に折り曲がっているため、じゃまになりません。寒い冬、家の中で座り続けて仕事をする時に使っていたため、何枚も布を重ねたり丈を長くしたりしていました。

もとの布地が分からないくらいたくさんの小さな布でつぎ当てがされ、物を粗末にせず、大切にしようとする心が表れています。

〈“栗山”ってどんなところ?〉

江戸時代、栗山は、<sup>かわまた のかど</sup>湯西川・川俣・野門・<sup>どうぶ ぐろべ ひがひ ひなた</sup>上栗山・土呂部・黒部・日蔭・日向・西川の九つの村からなっており、「<sup>くりやまごう</sup>栗山郷」といわれました。

高い山に囲まれ、冬は<sup>きび</sup>厳しい寒さや深い雪のため、他の町や村との行き来は大変でした。

そのため、生活の仕方やことばにも、それぞれの村ならではの形があったといわれています。

～とちぎ<sup>じん</sup>人の想い～

栗山地域の日向の『ジブ』には、女性が<sup>ふだんぎ</sup>普段着として使うものがありました。すり切れた部分に、<sup>あさ もよう ししゅう</sup>麻の葉模様の刺繍をしたり、自分の好みの布をあて布に使ったりして、おしゃれを楽しむ気持ちも忘れませんでした。

<sup>さいたくかい ごしえん しせつ</sup>＜在宅介護支援施設ひだまり

(日向地区)の皆さんより>

## しもつかれ

はつま 初午（2月最初の午の日）は、豊年を祈る稲荷神社の祭りの日であり、栃木県では、しもつかれを作る風習があります。正月の塩引き鮭の頭、節分の大豆、大根やニンジンなど、その季節に手に入る食材を煮込んだ料理で、食べ物をむだにしない文化として伝わっています。



赤飯としもつかれ  
(平成 22 年鹿沼市笹原田 県立博物館提供)

### ～とちぎ人の想い～

- ・「しもつかれ」ということばを聞くと、“ふるさととちぎ”を思い出します。
- ・初午には、稲荷神社に赤飯と「しもつかれ」をお供えしていました。



鬼おろしで大根をおろす  
(平成 22 年鹿沼市笹原田 県立博物館提供)

### 〈しもつかれの説明〉

「しもつかれを7軒食<sup>ちゅうふう</sup>べると中風※にならない」といわれるほど、栄養満点の料理です。（3軒、5軒というところもあります。）

また、「各家庭によって味が違う」といわれ、お互いに味比べとして交換する風習もあります。

学校給食のメニューになっている地域もあります。

鮭の頭は正月に食べた鮭、大豆は節分に煎った福豆など、その季節に手に入る食材を使って作られたしもつかれは、「食べ物を無駄にしない」栃木県人の知恵が生みだした優れた郷土料理といえます。

※中風＝脳内出血などの病気。

しもつかれで使う  
大根やニンジンは、  
「鬼おろし」で  
おろすまるね☆☆



## ジャンボン

お葬式そうしきのことです。大切な人が亡なくなったときに、人々は、その人のことを思ったり、様々なことを願ったりします。ジャンボンの儀式ぎしきには、亡くなった人への敬愛けいあいを込め、多くの地域ちいきの人々が関わって行われてきました。



のべおく  
野辺送り

(昭和 47 年宇都宮市  
柏村祐司氏撮影 県立博物館提供)

～とちぎ人の想い～

昔は、地域の人たちみんなで役割を持って、協力してジャンボンを行っていました。とても遠くまでジャンボンツカイをして、お疲れ様でしたと感謝されたことを覚えています。

大切な人が亡くなることは、とても悲しいことまる。地域に住んでいる人みんなが、亡くなった人のことを思っていたまるね。



〈ジャンボンの説明〉

ジャンボンという呼び方は、ミョウハチ（シンバルのような形の仏教で用いる楽器）の音が「ジャランボーン」と聞こえるからといわれています。

地域によっては、ジャンポー、ジャーポー、ジャアボ、ジャンボなど色々な呼び方があります。

ジャンボンは、地域の人がお葬式そうしきや葬列れつに参加するだけではなく、墓はかの穴を掘ることや、棺ひつぎを運ぶこと、死者の服装を作ること、食事の準備をすることなどが含まれ、地域全体で、死者の霊魂れいこんを送り出す風習でした。

親戚しんせきなどに亡くなったことを知らせに行く人を、ジャンボンツカイといいます。ジャンボンツカイは、確実に伝えることができるように二人一組で出かけました。

## 十九夜様 (じゅうくやさま)

十九夜様は、女性の守り神です。19日に地域の人たちが集まって十九夜様をまつり、地域内の女性の安産を祈った風習で、今も続いているところもあります。県内には、各地に十九夜様の石仏を見ることができます。



十九夜様

(昭和46年宇都宮市岡本)

柏村祐司氏撮影 県立博物館提供)

## ～とちぎ人の想い～

私の地区では、年に一度ですが、ふたまたの杉の木を塔婆(祈りの文字が書かれたもの)にして、酒、米、削り節、塩、線香といっしょに十九夜様にあげます。昔は女性だけの参加でしたが、今は、男女の別はなく、地域の各家に参加が呼びかけられます。これからお産する人たちの無事を地域のみなさんで祈るものであり、これからも続いてほしいです。

## 〈十九夜様の説明〉

月の満ち欠けが約30日で1周するので、昔は月の動きに合わせて1か月間を決めていました(旧暦という)。

そのため、月と人々の生活の関係は深く、月に願いや感謝の思いを込めた行事を行ってきました。

栃木県内では、旧暦の十九日は、回り番の当番の家に地域の女性が集まって安産を願いました。そのなかで、「十九夜様の石仏の前に供え物をする」、「まつる場所に塔婆を立てて祈る」、「月が出るまで念仏を唱え、飲んだり食べたりする」などしました。

「十九夜様」は、日ごろから家事や子育て、農作業に忙しかつた女性たちの楽しみとして、飲んだり食べたり、世間話に花を咲かせたりした日でもありました。



地域の人たちが語り合い、絆を深めた行事だったまるね。